ふるさとの誇り⑦

徳島堰（せぎ）と原七郷

白根地区にある徳島堰をご存知でしょうか。全長約17㎞、日本3大堰の一つにも数えられている灌漑用水路です。ではなぜ、その名前には地名にない「徳島」がつけられているのでしょうか。

昔、御勅使川扇状地上の村々は、飲み水はもちろん、畑の水にも困っていました。江戸から旅をしてこの地を訪れていた徳島兵左衛門は、広い荒地を見て驚きました。堰（用水路）を作り水をひけば、水田や畑ができる、さらに、そこに舟を通せば米や塩を運ぶことができると考えました。

白根地区には北側を御勅使川が流れています。しかし、御勅使川は、夏になると水田に水を使うためほとんどなくなってしまい、その水を利用することはできません。そこで兵左衛門は、韮崎市円野町上円井の釜無川から水を引くことにしました。工事を完成させるため、昼だけでなく夜もちょうちんをつけ、堰の深さを決めながら、掘り進めたと言われています。

取水口から最終地点の曲輪田新田までの間には、何本もの川が山から流れ下っています。徳島堰を造るにあたって悩みの種は、これらの川をいかに横切らせるかでした。多くの川では川の下に木製の箱樋を埋め、トンネルにして水を流しました。一方御勅使川は川幅が600メートルもあるため、"板せき"という特別な方法で、堰の水を渡しました。

春の徳島堰

2年かかり櫛形地区の曲輪田まで堰ができたその年、台風により堰全体が埋まってしまいます。このため工事資金が不足し、また工法が尽きたなどの理由から、兵左衛門はこの地を離れてしまいます。一説には兵左衛門の取り分を惜しんで、堰完成目前に幕府が兵左衛門を追放したとも言われます。その後この地を治めていた甲府城代は、家臣津田伝衛門と有野の矢崎又右衛門に復旧工事の引継ぎを命じます。矢崎又右衛門は心血を注いでこの復旧事業に取り組み、寛文10年（1670）、ついに完成することとなりました。堰は幕府が直接管理することになり、兵左衛門の功績から、「徳島堰」と名づけられました。

堰が完成したことにより、新たに畑や水田が作られ、飯野新田や曲輪田新田などの新しい村ができました。しかし、この堰ができても水が届かない村が御勅使川扇状地上に7つありました。上八田、在家塚、西野、桃園、上今井、吉田、小笠原、これらの村を原七郷と呼び、農業に使う水はもちろん、飲み水にも困る生活をしていました。古くから地元でいわれてきた「原七郷はお月夜でも焼ける」の言葉は、月の弱い光でも乾燥してしまうほど水の乏しい土地を表しています。

原七郷まで灌漑できなかった徳島堰ですが、昭和49年釜無川右岸土地改良事業により、スプリンクラーが設けられます。現在徳島堰の水は水田だけでなく、かつて原七郷と呼ばれた地域の果樹を潤し、今の南アルプス市を支えています。

徳島兵左衛門夫妻の墓（了円寺）